六べえだぬき

さねとうあきら 作　　井上洋介 絵

六べえだぬき　《創作 わたしの民話》

著者　さねとうあきら　発行者　佐藤武雄
©さねとうあきら 1973
発行所　文研出版　東京都文京区向丘２－３－10　大阪市天王寺区大道４－128
印刷所　図書印刷株式会社
製本所　図書印刷株式会社
著者との契約により検印廃止・定価はケースに表示してあります。

ふべえだぬき

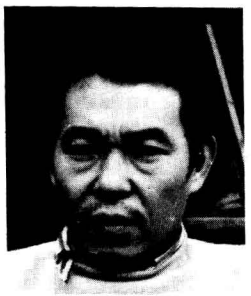
さねとうあきら作　井上洋介絵

文研出版

1 おかりば山の六べえ…6
2 ききんの年になると…10
3 役人おばけ……17
4 ひとりぼっちのカヤ…32
5 ずんべらぼうがすき…47
6 春のかりの日……58
7 そして、そのあとに…74
あとがき・さねとうあきら 80

井上洋介 絵

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



井上洋介(いのうえ・ようすけ)

先生は1931年東京に生まれました。武蔵野美術学校西洋画科を卒業後ユニークなさしえをかかれ、第11回文芸春秋社漫画賞、第4回東京イラストレーターズクラブ賞などたくさんの賞をもらわれました。さいきんの作品には「地べたっこさま」「ゆきこんこん物語」(理論社)「ウーフはなんにもなれないか?」(ポプラ社)などがあります。

さねとう　あきら(実藤　述)

先生は、1935年、東京で生まれました。早大文学部演劇科中退。ながらく、劇団仲間・文芸演出部に属して、こどものための戯曲をかいてこられましたが、1972年、児童文学の処女作として、「地べたっこさま」(理論社刊)を発表、日本児童文学社協会新人賞、野間児童文芸推奨作品賞などをうけました。ほかの作品に、「ゆきこんこん物語」(理論社)、「なたねおりひめ」(ポプラ社)があります。

きょうはナ、ずしッと、おっかねぇはなしを、してやるか……。

しょんべんが、たまってるやつは、しーッと、やってこい。

おらンとこにゃ、テレビも、マンガも、ねえけど、おもしれえばなしなら、くさるほどあるだ。

まァ、ちびちび、きけや。

むかし、むかし、おおむかし……おめえたちのじっさまも、そのまたじっさまも、まンだ、うまれてねえころのはなしだ——。

おかりば山の六べえ

六べえだぬきは、おかりば山が、ねぐらだった——。

おかりばっていうのは、とのさまが、かりをして、あそびなさるところだから、木こりも、百姓も、けっして、はいっちゃなんね——という、きびしいおきてがあった。

だけど、たぬきの六べえにしてみたら、こんなに、すみごごちのよい、ごくらくみたいなところは、なかった。

とのさまが、かりにくるのは、春と秋の、二かいぽっきりだったし、すがたかたちのうつくしい、しかやきつねだったら、とのさまの矢にうたれて、毛がわにされる、しんぱいもあったけど、六べえときたら、たぬきのなかでも、とびきりきたない、よれよれのどぶだぬきでナ、うまれてから、いっぺんも、水あびをしたことがなかったので、どろと、あぶらによごれて、もじゃもじゃに、もつれた毛が、てらてら、くろびかりしていた。おまけに、だいのくいしんぼだもんだから、へびでも、もぐらでも、みみずでも、けら虫でも、かたっぱしから、もぐもぐ、ぺろぺろ、くっちまうだろ、いやもう、からだじゅうから、ぷーんと、いやなにおいがして、六べえが、やってきただけで、にんげんだろうが、けだものだろうが、こそこそ、にげだすありさまで、もちろん、とのさまにうたれて、毛がわにされちまうおそれは、なかったんだ。

とのさまが、かりにこないときでも、おかりば山のあちこちには、山番小屋があって、りっぱなさむらいが、見はりをしてた。うっかり、まちが

って、はいったら、きりすてごめんといって、いきなり、ちょんぎられても、もんくはいえなかったから、おっそろしいりょうしだって、役人の目がこわくて、よりつかず、ほんとうに、おかりば山のけものたちは、このさむらいたちに、まもってもらってるようなもんだったヨ。

だから、六べえのやつも、こうぶつのじねんじょ（山いも）が、うじゃうじゃ、うまってる、しだのしげみのおくに、ずどんと、でっかいほらあなをほって、ぐーこら、ひるねばっかりしてればいい、なんともかんとも、けっこうな身分だったのサ——。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ききんの年になると、

ところが、どえらいききんが、三年もつづいて、村じゅうの百姓が、くいもんのかけらもなくして、そこらじゅう、たべられそうな木の実や、草の根っこをさがして、うろつきまわるようになると、おかりば山のけものたちも、そうそう、のんきにしてられなくなった。

なにしろ、ききんになろうが、なるまいが、とのさまは、がっちり、年ぐをとりあげちまうんで、ふつうの年でも、くいもんなんて、ろくろく、のこりはしなかったのに、ききんにでもなろうもんなら、いやはや、百姓たちはおだぶつだ。

くいもんばかりか、きものから、はたおりのはたまで、銭こや米にかえて、とのさまに年ぐをおさめると、あとはもう、うえじにしかけたおお

かみみたいに、うろうろ、野山をあるいて、くちにはいるものなら、木の実や、草の根っこばかりか、とかげでも、ばったでも、くった。

ぜったいに、はいっちゃなんね——というおきてのある、おかりば山だって、はらへらしの百姓にしてみたら、くいもんのどっさりつまった、たからの山だ。

こそこそ、夜のうちに、おかりば山のりゅうじん池で、こいやら、なまずなんかを、つかまえてたうちは、まだましだったが、そのうちに、ひるまでも、ごそごそ、がさがさ、やぶや、しげみのなかを、はいずりまわって、けものや、とりたちを、おいかけまわしだしたから、いちだいじ！

すばしっこいのがじまんで、とのさまのかりのときだって、ちくッとも、矢をうけずに、十ぺんも二十ぺんも、すがたをくらましちまった、げんたぎつねも、うっかり、ほらあなをでたところを、ぼかーんと、やられて、あっさりくたばった。

いつも、ささッ原のおくで、ぶォぶォ、はなをならしてあそんでた、七

ひきのうりんこ（いのししのこども）のきょうだいは、おッ母あが、えさをさがしにでたるすに、かげもかたちも、なくなってたし、そのうりんこたちをさがしに、まっしぐらに、さとにむかって、はしりだしたおッ母あいのししも、どうやら、ししじるにでもされちまったのか、二どと、もどっちゃこなかった。

そういえば、年がら年じゅう、おかりば山のうえにむらがって、ぎーぎー、がーがー、なきわめいてた、かけすや、むくどりも、めっきり、かずがへって、なんだか、空までが、ぽかーんと、ひろくなっちまったみたいだし、くわれちまったのか、ねぐらにかくれたのか、げんきもののむささびやら、さるや、りすのわらしまで、すっかり、すがたをみせなくなって、おかりば山ンなかで、うごいてるもんといえば、ほうかむりして、こんぼうをにぎった、ぬすっと百姓ばかり——。

さすがの六べえだぬきも、たぬきじるにされちまうのが、おそろしくて、ほらあなのおくにかくれて、ぎとぎと、目だまをひからせてたが、なにし

ろ、どうしようもないくいしんぼだろ、三日も、だんじきさせられると、めりめり、はらがいたくて、いまにも、しにそうだったんだ。

（くそォ……山のくいもんを、にんげんばかりに、とられて、たまるもんけい！　なんとかして、おらも、ねずみ一ぴきでいいから、がぶッて、かじりてえもんだ……ああ、はらへったよゥ！）

って、あさからばんまで、くどくど、くよくよ、おんなじことばかり、かんがえてたが、やがて……

（んだァ、百姓どもは、役人みたら、びっくらして、こしぬかすぞ……お、おらァ、役人に、ばけりゃいいんだ！）

って、すてきなことに、気がついた。

なるほど、百姓においかけられる、けものや、とりだって、いきたここちは、しなかったけど、ここにしのびこむ、百姓のほうだって、いのちがけだ。とのさまのおかりばに、かってに、はいってくるんだから、いつころされたって、もんくはいえない。このごろは、山番の役人のみはりも、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com